「今夕特に若いお二人に御越しを願つたと云ふのは、私の體驗談をお聽かせしようと思つたからです。御承知の通り、私の妻は英國人で私は日本人です。そして共に相當の教養を持ち、自制もあつて、思想上にも何等疎隔さるべき理由はありませぬ。然るに老來、異民族の情緒はしつくり合はないものであることをしみ〴〵と感じます。自分の體驗を云ふと、互に性慾がある時代は、異民族の結婚も同種族の結婚と少しも異つたことはない。併し性慾が衰退して來ると、民族的情緒が目を醒まして來るのを感じます。言ひ換へれば「茶話し」が出來ない。離れ離れの情緒を味ひつゝ無駄つ話しをせねばならぬ。これは非常に苦痛なことで又互に不幸なことである。この意味に於て、私は異民族の結婚は不可なりと信ずるものである」

と、しみ〴〵と話された――と云ふよりは宣告を下されたと云ふ話を、その當時私はH自身から聞きました。

その外、先年米國で長逝された高峰博士も、晩年頻りに

「疊の上で坐つて茶漬が食べたい」

と云はれたそうであります。

これと反對に、西洋人に就いて見ましても、日本に數十年も住み慣れた宣教師、例へば同志社のラルネット博士の如きでも、晩年には皆故國に歸らずには居られなくなつて居ります。

其の外日本の土と化すべく決心して、日本の文學に親しみ、日本の妻女

を迎へ、自分の名前まで日本人とした小泉八雲先生でも、その遺稿たる書翰集を讀むと、「日本に就いて學び得たことは、自分には日本が全然解らないと云ふことである」と書いて居られます。

要するに支那でも古くから「越鳥南枝に巣ひ、夷馬北風に嘶く」等申して居ります通り、各民族には民族精神なる一つの力があつて、その力が民族情緒の重心點を決定して居ります。故に民族精神は生活の形式を左右しますが、生活の形式が變化したからと云つて、本體たる民族精神が直ちに失はれるものではないと云ふことが斷言出來る譯であります。

民族精神とは何ぞや

然らばその民族精神の内容は何であるかと云へば、第一は地理的情操であり、第二は歴史的感情であります。

第一、地理的情操

地理的事情が相似て居れば、民族情緒にも相似た點が必ずあるものです。この點に關しては昭和五年二月の學士會月報第五〇三號に於て、技研海士なる人が「島嶼情緒」の一文を發表せられて居ります。記憶に存するまゝその趣旨を拜借しますと次の通りであります。

「民族の感情を最も直截に表はすものは音樂である。自分は南洋諸島、カ

ロリン、マーシャル、ジャワ、スマトラ、ハワイ等諸方の島嶼を歴訪した。そしてその諸島嶼の音樂を味はつて見ると、これを一貫した情緒が存在することを痛感せざるを得ない者である。それはスコツトランドの山麓で聞くスコツチパイプの音律にも、ジャワの三味線、ハワイのギイター、南洋のバンヂヨー、日本の尺八、追分節、その他の音調にも一貫して存する音律――哀調即ちこれである。この哀調は何であるかと云へば一種の島嶼情緒であり、島嶼情緒の本體は孤獨寂寥である。この孤獨寂寥の哀調が、世界到る處の島嶼國に音樂となつて表はれて居る」

即ち地理的相似から來る相似情操の存在を立證せられて居るのであります。

右の外、日本には「氣候山川」の項で申しました通り、特殊の地理的環境がありますから、日本民族としての特殊情操があります。この情操こそ日本民族を特性づける情操であると同時に、日本人から容易に失ふことの出來ない情緒であると信じます。

第二、歴史的感情

第二は民族の歴史的感情であります。生物學者の説に從へば、生物はその種族保存の必要上、重大なる體驗は快樂、恐怖等の形に於て種族の間に永く保存され、遺傳されて行くそうです。その證據に我々が日常「恥しい」とか「恐ろしい」とか「氣味惡い」とか感ずる心理狀態は、心理學上の説明は出來ないが、生物學上の證明は付くそうです。つまりそう云ふ感じを起させる事實を探究して見ると、それは數千年又は數萬年以前に、我々の

種族を甚しく恐威した事實であると云ふことが出來るそうです。例へば大便の現行を人に見られて恥しいと思ふのは、その時こそ最も防禦に對して油斷のある時であるから、その油斷を人に見られまいとする生物の自衛本能から來る感情だと云ふことであります。

又暗闇や森林の中を通るのを恐ろしいと感ずるのは、そうした箇所に敵が隱れて居て、生命を嚇やかした幾世紀の體驗が、そう云ふ感じとなつて殘つて居るのだと云ふことであります。

又蛇、百足、蜥蜴等主として爬蟲類を見ると、一種身の毛のよだつ樣な無氣味さを感ずるのは、未だ人類の發達する以前に、これ等の種族が猛威を逞ふし、人類を徹底的に虐げた、その頃の恐怖がお互の心に潛んで居るのであると云ふことです。

學者はこれを潛在意識(Organic Memory)と名けて居りますが、要するに右の事實は、人類の歷史的感情が一朝一夕で滅失するものでないことを證明して居るのであります。

以上既に申しました通り、日本の國民精神なるものは、日本特殊の地理的情操と、日本特殊の歷史的感情とによつて釀成され、今日迄發達するには、民族發生以來の時日を要したのであります。故に單に西洋の衣服を着け、西洋の家に住つて、西洋の食事を食べても、日本人は西洋人になり切れないことは明白であります。

本篇によりて得たる結論

然らば、西洋文化の輸入に夢中になつて居る現在の日本は、日本から何を失はんとし、西洋から何を得んとするものであるか。舊日本の形式の崩壞は悲觀か、樂觀か。此の點を最後に靜かに考へて見たいと思ふのであります。

1　日本が西洋文明に求むる處のもの

日本の文明は、その內容から申せば共存共榮であり、平和であります。然るに西洋の文明は、その內容に於て自我主張であり、弱肉强食であり、鬪爭であります。故に文化の內容から云へば、日本文化は西洋文化より人道的であり、優越的でありまして、彼れより求むる何物もありませぬ。

而かも現在の日本は、在來の行き方で滿足することは出來ないのであります。河水の滔々として低きに就くが如く、不徹底と不合理を振り捨てつゝ清新な世界へと突進して居ります。これは現今の日本としては實に已むを得ざるものであります。併し日本が現在西洋文化に求めて居るものは、そうした野蠻鬪爭の精神ではありませぬ。內容にあらずして形式であります。具體的に云へば、西洋の衣食住の中に表はれた精神を學ばふとするものではなく、それの造り方に發揮せられた理智的方法であります。理智的方法とは何ぞや。曰く西洋に於て發達した近代科學であり、科學的方法による文化向上の諸外形であります。換言すれば、本來の東洋精神——即ち

人類の眞の平和と、共存共榮を完全に實現するために科學的、合理的方法を採擇する一階梯として西洋文明を珍重して居るのであります。この點以外に日本人は西洋文明に多くの期待を有ち得ないのであります。

2　日本民族の理想

以上を要約するに、日本は今や生活内容の變化と共に、在來の形式を放拋せざるを得なくなつて居ります。そしてもつと科學的な合理的な生活方法を講じようと焦つて居ます。

衣食住の歴史を見ますと、日本は幾度かかうした外來文明の波濤に揉まれた經驗があります。而かもその都度これを適宜に乘りこなして、その中から日本民族としての特色を失はない文明の花を咲かせて居ます。

然るに今や家族制度は危機に瀕し、溫良なる子女は解放を叫び、人情の美風は腐たれ、學校ではストライキが起つて居ます。日本全體が西洋思想で洗ひ晒されて居る樣に見えます。

併し仔細に觀察しますと、吹き折られ洗ひ去られて居るものは、大部分枯れ枝であり落ち葉であります。それ等は勿論過去に於ては日本文明を築き上げ太らせるに必要なものでありました。民族史上缺くべからざるパートを演じたものに相違ありませぬ。が、今では要するに最早や役に立たないものです。勿論中にはそれ等と一しよに有用な枝や葉も崩壞し沒落して行きませう。これも已むを得ないことです。唯喜ぶべきことには、日本民族として最も大切な民族精神――平和と共存の精神――は、深い根ざしを

只つて安全に地中に殘つて居ます。その根幹から、秦々として日本文明の芽が吹き出ます。

故に日本は現在の衣食住に滿足して居らぬが如く、西洋の衣食住をそのまゝ取り入れたからと云つて、決してそれで滿足し得るものではありませぬ。もつと〳〵純日本式の衣食住が創設されるまでは――言ひ換へれば、日本民族的精神を盛つた衣食住が完成せられるまでは、日本人は次から次へと向上を計つて止まないでありませう。日本民族にはそうした特別の使命が先天的に授けられて居る樣にも思はれます。

その證據に學者はよく申します。世界の文明は中亞に曙光を發し、一方は東漸し他方は西漸し、各々特色ある東西両洋文明を達成しましたが、その両洋文明が今や日本で落ち合つて居る。そして双方の文明を公平に味ひ得るものは日本民族以外にない。故に日本は両洋文明の精萃を吸收して居るのであると。

私はその說に更に蛇足を附加したい。古來の文化の歷史を觀ますと、優秀な世界文化は、島嶼情緒を有つた民族によつて種子を蒔かれて居ます。例へば歐羅巴文明はギリシヤ、ローマと云ふ半島國から芽生えて居ます。米大陸の文明は英國と云ふ島嶼民族から發生して居ります。現在の世界を振り返つて見て、各國の眼をつけて居るのは、亞細亞大陸であります。無盡の富源を藏し、人口及面積の點で世界の何れの大陸にも讓らないこの大陸に、文明の黎明は未だ見えて居ませぬ。若し來るとせば東方より――日

本より、眞の大文明が曙光を發して來るのではありますまいか。歐羅巴大陸、米大陸の歴史から見れば、島嶼民族たる日本こそ正に世界の眞文明に光を投ずる者であるべきだと思ひます。何故なら鬪爭の内容を持つた文明は、世界到るところの民族が共有して居り、その文明が一時的平和を現出したこと屢々であります。併しかくの如き平和は、例へば軍縮協定（有形又は無形に）と云ふが如き權力の均衡を保ち得た瞬間のみに止まります。次の瞬間には嫉妬と貪慾と自我主張が爆發します。然るに日本民族の持つ精神文明は自然であり、平和であり、共存共榮であります。故にこの精神の基礎に樹立せらるゝ文明こそ、眞に世界的文明であると思ひます。この意味に於て、西洋文明の科學的方法を學ぶことは誠に喜ばしいことであるが、盲目的追隨は春秋に富む日本民族たる者の互に相戒むべきことだと思ひます。

昭和五年八月十八日印刷
昭和五年八月廿四日發行

〔定價金八拾五錢〕

著作者　山崎高晴
大阪府豐能郡池田町滿壽美七〇五

發行者兼印刷者　村上蕃
神戸市相生町三丁目五十六番屋敷

印刷所　神戸社印刷所
神戸市相生町三丁目五十六番屋敷

大阪　梅田
發賣所　阪急百貨店書籍部

終